

# 東京大学新聞 全11巻〔昭和24年→45年〕・別冊1



### ●復刻版概要

体裁 A4判クロス装函入 中性紙使用

総四、二七六ページ

配本 一九八五年六月→八六年五月(計五回配本)

索引 各巻の巻頭に《記事索引》を付す

付録 別冊付録として《執筆者索引》

《東京大学新聞歴史年表》を付す

定価 二〇万円 (全11巻別冊1揃い)

### ●配本予定

第一回配本	第一巻 昭和24年→28年	八五年六月刊	定価三八、〇〇〇円
第二回配本	第二巻 昭和29年→31年	八五年十月刊	定価五四、〇〇〇円
第三回配本	第三巻 昭和32年→33年	八五年十二月刊	定価五四、〇〇〇円
第四回配本	第四巻 昭和34年→35年	八六年二月刊	定価五四、〇〇〇円
第五回配本	第五巻 昭和36年→37年	八六年五月刊	定価五四、〇〇〇円
第六回配本	第六巻 昭和38年→39年		
第七回配本	第七巻 昭和40年→41年		
第八回配本	第八巻 昭和42年		
第九回配本	第九巻 昭和43年		
第十回配本	第十巻 昭和44年		
第十一回配本	第十一巻 昭和45年		

### ▲紙名の変遷

『東京大学新聞』創刊号(昭和24・1・28)→第二八七号(昭和32・3・25)  
『東京大学新聞』第二八八号(昭和32・4・10)→現在まで継続

### 不二出版

東京都文京区向丘一丁目二番一三三 電話〇三―八二―四四三三 FAX〇三―八二―四四六四

本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

(取扱店)

昭和30年11月21・28日合併号より

## 激動の戦後史を語る 知的オピニオンリーダー紙…復刻成る!

### 復刻の辞

●戦後、東京大学における学生新聞は、『帝国大学新聞』(大正9年創刊)の休刊のあと、昭和24年1月28日『東京大学学生新聞』としてスタートする。この『東京大学学生新聞』は、学内団体の東京大学学生新聞会の発行、週刊二ページ立て(のちに四ページ)、昭和32年3月まで合計二八七号発行を

れる。その後、同年4月より(財)東京大学新聞社によって『東京大学新聞』が復刊され、『東京大学学生新聞』を吸収・継承し、現在まで継続刊行されている。●弊社では、今回の復刻版刊行を昭和24年から、昭和45年までとした。この敗戦後の時期において『東京大学学生新聞』『東京大学新聞』は、大学・学術全般の刷新と社会体制の変革をもリードする役割をになっていた。歴代総長の講演や式辞をはじめ



め、各学部教授、学識経験者、評論家、ときには政治家、実業人の随想や論説が紙面を飾り、一種の知的オピニオンリーダー紙として存在したと言える。

●この様な『東京大学新聞』は、学内においても数組の原本を残すだけの貴重な資料となっている。弊社では、当時の編集者および(財)東京大学新聞社の協力によって、縮刷・復刻版を刊行する。本復刻版には、記事索引を付すと共に、『執筆者索引』を付し、利用者の便をはかった。

●『帝国大学新聞』(全17巻・別冊1)の復刻版と共に、本復刻版が、現代史、思想史、大学史等、広く活用されることを期するものである。

# 東京大学新聞

●全11巻〔昭和24年→45年〕・別冊1 不二出版



# 復刊前後のこと

伊藤成彦 ●中央大学教授

『東京大学新聞』を復刊しよう、という話が起ったのは、たしか一九五六年の冬だった、と思う。

当時、アジアはバンドン会議以後、新しい気運が起っていたが、日本は全般的に沈滞し、学生運動も低迷していた、そのために、学生運動の活動家たちを集めて、その打開について語り合い大座談会を『東京大学学生新聞』で企画したりもしたのだった。

そうした中で、沈滞している日本の思想界、文化界に風穴を開けるような、知識人のための新しいメディアをつくる、という話になり、それが旧帝大新聞のイメージと結びついて、『東京大学新聞』の復刊という構想へとふくらんでいったのである。

当時、『学生新聞』にあつて復刊構想を推進したのは、谷川公彦、斧田太公望、天野勝文と私などで、私たちは旧帝大新聞OBの銀杏倶楽部や大学当局と何度か話し合いを重ねた。銀杏倶楽部では、「団長」とよばれていた奥山信一氏や、『週刊朝日』の編集長だった扇谷正造氏、毎日新聞学芸部長だった高原四郎氏などが、また大学では、矢内原忠雄総長と新聞研究所長の千葉雄次郎氏が、復刊のために積極的に協力して下さった。

今でも鮮やかに覚えていることは、いよいよ復刊となつたときに、矢内原総長が、当座の運転資金に使いなさい、と大学から五十万円を提供して下さいましたことだ。私たちはそれを有難く拝借して、一年間でそれに倍する利潤をあげ

ることができたので、その翌年に返却した。

復刊した『東京大学新聞』が、一年間で経営的にも安定することができたのは、紙面を一新し、鉄道弘済会にも販売を依頼して、発行部数が急速に伸びたことにもよるが、広告面を支えた東京弘報社の村越社長と、広告集めの名人だった江副浩正君の活躍によるところが大きい。

一九五六年は、ソ連共産党二十回党大会でのスターリン批判をはじめ、中国での『百花齊放、百家争鳴』、ポーランドのポツナニ暴動、さらにハンガリー事件などが相ついで起つた年で、大学に根柢を置く知識人の新しいメディアをめざしていた私たちは、これらの事件の思想的、文化的意味を追究した。サルトルが『レクスプレエ』誌に発表したハンガリー事件についての見解を、いち早く翻訳・要約して一面に掲載したのも、そうした意気込みからだった。

小説・評論のための『五月祭賞』を設定したのも同じ理念からだったが、その第二回に『奇妙な仕事』で受賞して文壇にデビューした大江健三郎氏は、その当時はしばしば編集室に遊びに来ていて、サルトルの論文を掲載したときには、後に中央公論社に入社して『海』の編集長となつた増島彦氏と一緒に、翻訳を手伝ってくれていたのである。

## 戦後史に新たな資料を加えるもの

内川芳美 ●成蹊大学教授

東京大学新聞社は、さきに、前身である『帝國大學新聞』(一九二〇年創刊)の復刻版を刊行した。帝國大學新聞の歴史

## 『帝國大學新聞』復刻刊行を推す

(五十音順)

- 千葉雄次郎 — 朝日新聞社顧問
- 辻清明 — 東京大学名誉教授
- 寺崎昌男 — 東京大学教授
- 殿木圭一 — 文政大学名誉教授
- 野沢隆一 — 信越放送取締役
- 平岡敏男(86年死去) — 毎日新聞社会長
- 福武直 — 東京大学名誉教授
- 勝本信之助 — 日本合成ゴム会長
- 小田切秀雄 — 法政大学名誉教授
- 江副浩正 — リクルート前会長
- 扇谷正造 — 評論家
- 石堂清倫 — 社会運動史研究者
- 天野勝文 — 筑波大学助教授
- 伊藤成彦 — 東京大学教授

的価値が正当な評価を受けたためであると思うが、この復刻版は別冊を入れると全十八巻という大部のものであったにも拘らず、幸いにも予想以上に多くの方がたの支持を得て、無事刊行を完結することができた。この機会に、ご後援を賜わった各位に衷心から御礼を申し上げるとともに、出版元である不二出版のご努力に深く謝意を表する次第である。

ところで、東京大学新聞社では、このたび、引続いて、戦後版の『東京大学新聞』の復刻版を、同じく不二出版のご協力を得て刊行することになった。

この戦後版には、『東京大学学生新聞』(一九四九年～五七年、ならびに今の『東京大学新聞』(一九五七年～)の、東大紛争がひと区切りついた一九七〇年までの分が収録される予定である。『東京大学学生新聞』は、『帝國大學新聞』を改題した『東京大学新聞』が、一九四八年に新聞用紙割当て削減問題から無期休刊に入ったあと、それとは別途に、東

昭和35年6月18日号より

## 東京大学新聞

週刊 東京大学新聞社 東京都文京区上野一丁目六番地 電話 3691-6674

## 追悼号

### 読者へ

アイク助は追悼されたが、昔はなまなま、あんな組員(八の字)の若者は追悼されず、また、その若者も、一人の人間の生がながたれた。『追悼号』は、追悼された若者の生がながたれた。追悼された若者の生がながたれた。追悼された若者の生がながたれた。

## 全東大に悲しみと怒り

権力の黒い手、黒い靴が

「中館報告」に疑問 殺されたのだ、目撃者

## 樺美智子さん 貴い犠牲に



樺美智子さん

## 警官の暴挙に強く抗議

責任政治の回復はかれ

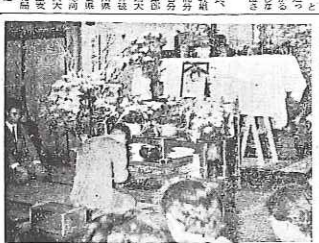


追悼会の様子

### 金庫から追悼文

### 秋田雨雀氏からも

追悼文 行かなければならず 帰ってならぬ人なのか



追悼会の様子

追悼文 行かなければならず 帰ってならぬ人なのか

## 買ったフリップの否定



幾十万の生の獲得を

## 樺さんの出

あまりにも鋭く悲劇的な

樺さんの出 あまりにも鋭く悲劇的な

## 樺さんの大学

呼びかける

樺さんの大学 呼びかける

## 通夜、淋しく行なわる

くちびる囁む学友も

通夜、淋しく行なわる

## 行かなければならず

帰ってならぬ人なのか

行かなければならず

## 追悼文

追悼文

## 秋田雨雀氏からも

秋田雨雀氏からも



# 一九四九年

昭和24年1月  
昭和24年12月

## ニュース

新国会へ教育諸法は動く、大法法は教則案か／イン  
ターンもめる中央委で共同闘争決議／給与問題め  
ぐって立上る東大職組  
1 生産科学研究所生れるか、新学制を機に構想は進む  
2 東大新卒業者就職状況／銀杏並木を去る十四教  
3 授／現学生の実態／反ファシズム東大大会開かる  
4 全学連第一回臨時全国大会終る／東大消費生活  
5 協組生る／低利資金の貸付全協連、政府当局に要  
6 求／立法に再び人事問題起る……  
7 学術会議基礎研究費四〇億／中央機関は全国公道選  
8 発足する東大消費生活協組／東大職組の動向／赤  
9 字となった収支赤字生活調査／人文科学委員団  
10 体となるか／東大理事系卒業生就職状況／翻訳を終  
11 る三十一論文海外へ／中央委公開発表インター  
12 ン問題更に発展  
13 大法法反対に燃起／東大の動き・全国の動き・大法  
14 法の焦点・南原総長学生運動に望む・大法法をめ  
15 ぐる文相との対談／狭き門、東大の入試状況(1)  
16 職組人員整理に反対／国大法案反対教育復興  
17 文教育界三三四四億二千万／大法法案反対教育復興  
18 民大会開く・東大、行動隊の活躍目覚まし・全国  
19 全国協議会の意気／困難な学業の継続文部省  
20 学徒厚生課調／各党に聴く大法法／東大アルバイ  
21 教員会来学期早々メトロで開業  
22 教員の政治活動に断、教基法八条更に強化／ウオル  
23 ター氏と一問一答／晴れの卒業式総長平和を力説  
24 大法法問題教授に呼掛く／非日活動動に文化人  
25 反対／出身校別入学者数……  
26 非日活動委員会に関する共同声明(全文)……  
27 教育の崩壊をめぐる公聴会、文化の復興は我々の手  
28 で／入試は来月二十日頃／自治委員、民学同員全  
29 員不採用／宿に困る新入生／東大、全学自治会生  
30 るか／商大注目される人事／日大予科教組委員  
31 十二名解雇……  
32 教育問題解決を統括聞く学生大会／平和擁護への闘  
33 いパリに呼応し我が国でも盛大に挙行／民科全国大  
34 会パリへメッセージ／新制大学いよいよ募集開始

## 論説

創刊の辞／発刊に寄す(南原繁)／皆で育てる新聞  
(武井昭志)／三つの希望(扇谷正造)／本紙のあ  
りかた一特にその責任について(小野秀雄)……  
1 転換する文化人風土(畑中繁雄)……  
2 学生生活を救うもの……  
3 危機にある東大協同組合の動向(箕輪成男)……  
4 新制大学について……  
5 大法法反対の意義……  
6 大学の危機を克服しよう(山之内一郎)……  
7 卒業生諸君に贈る……  
8 平和問題に寄せて／卒業式に於ける演説(平和の擁  
9 護者)南原繁……  
10 研究費の山分と利益代表(伊藤貞市)……  
11 更春期の大学／社会科学を学ぶ若い友へ(福武忠)……  
12 祖国再建と大学(南原繁)……  
13 二つの学内問題／技術者となる若い友へ(糸川英夫)

## 政治・経済

国内情勢はどうなる／政治激動はまだ続く(鈴木安  
感)・経済再建方式の岐路(小林義雄・労働強い  
統一への動き(菅道)……  
1 博)……  
2 経済再建が難し／中国和平問題の展望(鈴木健次郎)……  
3 科学研究費は如何に作られたか(犬丸秀雄)／労働  
4 法規の改正をめぐって(有泉亨)……  
5 アメリカの景気変動(小原広勝)……  
6 北大西洋条約をめぐる米ソ勢力の均衡(島田勇)……  
7 本年度予算の意味するもの(1)(北原道貫)……  
8 二つの平和会議(岡田謙・ニューヨーク(佐  
9 藤定幸)／本年度予算の意味するもの(2)(北原道  
10 貫)……  
11 科学・思想

## 随筆

最近雑誌の動向と編集者の地位(園恵一郎)／文化  
展覧トリアーテ音楽波に乗るオペラ(丸山鉄雄)・  
演劇劇団再編成の一年(下村正夫)・映画後す  
りの危機(岩崎超)……  
1 新劇祭と経営者(井沢淳)……  
2 戦後文学の動向(長谷川泉)……  
3 労働管理方式の封建性(伊藤正雄)……  
4 住宅を如何に復興すべきか(高山英華)／波紋を起  
5 したクラブチエニコ事件(松尾邦之助)……  
6 ユネスコ最近声明の教えるもの(清水幾太郎)／二  
7 つの科学史(天野清著)「科学史論」(鎮日恭夫)・  
8 小倉金之助著「数学史研究」第一集(正蔵洋逸)……  
9 文学・芸術

## 映画評

「女の一生」……  
1 「大いなる遺産」(中野好夫)……  
2 「風の子」(早田秀敏)……  
3 「静かなる決闘」(岡本博)……  
4 ニュース映画の現状(若佐氏壽)……  
5 書評

## 第巻記事索引より

大戦没学生の手記『遙かなる山河』の収益金を基金として  
一九四九年に発行されたが、一九五七年に『東京大学新聞』  
が復刊されるにもなって、これに吸収継承された新聞で  
ある。  
思えば、南原繁総長の全面講和論に対する吉田首相の「曲  
学阿世」批判、ポポロ事件、樺美智子さんの死亡を招いた  
安保反対デモ、そして東大紛争など、頭に浮かぶままにあ  
げてみただけでも、一九七〇年までに東大の内外で起った  
問題や事件は、そのまま日本の戦後史の一部を形造ってい  
るものといつてよく、その意味で、今回『東京大学新聞』  
の復刻版刊行も、戦後史に新たな記録を加えその活用を促  
すものとして、社会的文化的に貢献するところ必ずし  
も少なくはないのではないかと考えている。  
各方面のご支持を得て、この『東京大学新聞』の復刻版  
刊行が無事完結することを衷心から期待している次第であ  
る。

## 「学園の心」の 忠実な記録

伴野文夫・NHK解説委員  
大学新聞は如何にあるべきなのか。政治的な主張を書く  
べきなのか、「報道」に徹すべきなのか。毎日々々が議論と  
試行錯誤の繰り返しであった。帝国大学新聞の先輩がやっ  
て来ては、徹しい注文を寄せられた。抵抗を試みたり、な  
るほどと感心させられたりしたものである。その頃、『東京  
大学学生新聞』から『東京大学新聞』への組織がえが行われ  
た。今から思えば、その過程は、大学という特殊な学生た  
ちの集落が、先鋭な隔離された箱庭から、徐々に周囲の「豊  
かな社会」にとりこまれて行く第一歩であったのかもしれない。  
私たちの次の世代は、そのあと安保闘争の激しい渦  
の中を通り抜けなければならなかったのではあるが。

東京大学新聞の復刻版が出ると聞いて、正直いつて大変  
に驚いた。三十年も前に、感ずるところを思うままに書き  
つらねたあの文章が、復刻されそのまま永久に保存される  
とは思ってもみなかったことである。あの日々の情熱が懐  
かしくもあり、未熟さが面映くもある。  
学園をいったん離れると、その日から学園の中の思考は  
解せなくなる。後輩たちが何を考えているのか、なぜそう  
した行動をするのか、しばしば理解に苦しむことになる。  
しかし、大学新聞は学園の中の思考を理解するための、も  
っともよい手がかりである。大学新聞は「学園の心」の忠  
実な記録であり、歴史である。  
ある時は学園の主張を書き、ある時は学園の中で見たま  
まを記録した。締切りの日に夜を徹して原稿を書きつづけ  
た記憶が甦えってくる。本郷の裏手のうす汚れた建物の一  
室の編集部で、夜が明けると喧々囂々論じあったもので  
ある。私が担当したのは第三面だった。つまり学園の中の  
社会面である。そこに当時の学園の中で感じとった「学園  
の心」を様々に語り盡したつもりである。この復刻版には、  
苦悩し、時代を敏感に感じとり、明日を先取りする「学園  
の心」が、確実に刻みこまれてはいるはずである。

## 東京大学学生新聞

本紙は昭和二十二年四月一日創刊。戦時体制下の言論統制に  
対し、戦時体制下の言論統制に反対し、戦後民主主義の確立を  
期す。戦後民主主義の確立を期す。戦後民主主義の確立を期す。  
昭和二十二年四月一日創刊。戦時体制下の言論統制に  
対し、戦時体制下の言論統制に反対し、戦後民主主義の確立を  
期す。戦後民主主義の確立を期す。戦後民主主義の確立を期す。

本紙は昭和二十二年四月一日創刊。戦時体制下の言論統制に  
対し、戦時体制下の言論統制に反対し、戦後民主主義の確立を  
期す。戦後民主主義の確立を期す。戦後民主主義の確立を期す。  
昭和二十二年四月一日創刊。戦時体制下の言論統制に  
対し、戦時体制下の言論統制に反対し、戦後民主主義の確立を  
期す。戦後民主主義の確立を期す。戦後民主主義の確立を期す。

本紙は昭和二十二年四月一日創刊。戦時体制下の言論統制に  
対し、戦時体制下の言論統制に反対し、戦後民主主義の確立を  
期す。戦後民主主義の確立を期す。戦後民主主義の確立を期す。  
昭和二十二年四月一日創刊。戦時体制下の言論統制に  
対し、戦時体制下の言論統制に反対し、戦後民主主義の確立を  
期す。戦後民主主義の確立を期す。戦後民主主義の確立を期す。

## 自治擁護に全学一致 警察手帳総長の手もとへ

二十二年四月一日創刊。戦時体制下の言論統制に  
対し、戦時体制下の言論統制に反対し、戦後民主主義の確立を  
期す。戦後民主主義の確立を期す。戦後民主主義の確立を期す。  
昭和二十二年四月一日創刊。戦時体制下の言論統制に  
対し、戦時体制下の言論統制に反対し、戦後民主主義の確立を  
期す。戦後民主主義の確立を期す。戦後民主主義の確立を期す。

## 学生一名逮捕さる

尾高教授、開学以来未曾有のこと  
二十二年四月一日創刊。戦時体制下の言論統制に  
対し、戦時体制下の言論統制に反対し、戦後民主主義の確立を  
期す。戦後民主主義の確立を期す。戦後民主主義の確立を期す。  
昭和二十二年四月一日創刊。戦時体制下の言論統制に  
対し、戦時体制下の言論統制に反対し、戦後民主主義の確立を  
期す。戦後民主主義の確立を期す。戦後民主主義の確立を期す。

## 戦後の青年像を 彷彿とさせる思い

樋口恵子・評論家  
おそらく、『東京大学新聞』縮刷版をまとめて通読すると、  
戦後の青年像の歴史と同時に、戦後の思想史あるいは運動  
史も鮮明に浮かび上がってくるのではないだろうか。一般



# 東京大学学生新聞

発行所 東京大学文学部図書室  
東京大学学生新聞部  
東京市千代田区千代田1-3-3  
電話小田川(03)357-1174  
発行日 昭和24年1月28日  
創刊 昭和24年1月28日

## 創刊の辞

本報を以て東京大学新聞と創刊する。  
本新聞は完全に学生の手による新聞として昨年八月の学生新聞への昇格を再考の成果、十月に東京大学学生新聞の自由参加により設立の準備を始めて以来多岐の困難を克服してきたものである。  
現在、二つの世界的な対立は激化の途をたどり、祖国の復興も前途多難を強懸せられて、我々の學問も風の飄々にはありえない。学生生活は益々大学の度を加え學問の改編、学生運動の抑圧、學問の自由と専断を關係する問題が相ついで起つてゐる。  
このような時に直向して生れ出す本新聞には多くの重大な使命が課せられてゐることを痛感せざるを得ない。東大學生、教職員、先輩を結ぶ相互交渉の機關たると共に、廣く學生、知識人のよき友として出立せんとする本新聞は何よりも先ず歴史の教を正し道を示さねばならぬ。又ともすれば象牙の塔を築きしめる學問に、絶えず現實の社會からの清新な風を吹き、學問と社會とを結ぶ細道とならうとするものである。更に迫る問題に對しては敢然として立ち上つた學生運動と共に、學問の民主化を推進し、學問の自由を守り、民主主義革命の一環としての役割を果さねばならぬ。  
本新聞は、絕對に一部派の新聞であつてはならず、眞理と自由を愛する全ての學生、知識人を開放してゐる。我々は東京大学新聞が過去二十八年に持つた、知識人の良心の灯としての輝き、その輝きから新しい教訓を汲み取ると共に、その新しい批判の上で立つて更に躍進せんとするものである。本新聞は、讀者諸君の多岐の関心と、自由なる批判を歓迎する。蓋し、學生、知識人と密接なつながりを持つて始めてその使命が全うされるべきである。  
本報の資金は、職務免除の手記「遙かな山河に」の出版に負つてゐる。債務競争の犠牲になられた先輩・學友の遺業を以て共に、新聞の發展によつてこれを報へんとするものである。讀者諸君の絶大な支持を希望してやまない。  
東京大学学生新聞會

## 發刊に

昭和24年1月28日、2月8日合併号より

## 大学法は教刷案か

新国会へ教育法は動く

昭和24年1月28日・2月8日合併号より

の新聞と違つて、大学新聞は、年々、編集にたずさわり、記事を書く人間が変わつてゆく。留年を続ける豪傑が時にまさつていたとしても、原則としてつくり手は現役の二〇歳そこそこの若者たちである。どの時代にも若者たちは東大新聞という場を通り抜けて去つてゆくが、東大新聞の歴史は限りなく積み重ねられていく。その時代の青年たちが、時代にどう反応しよう行動したか、時代を通じての青年の軌跡がきつと東大新聞から読み取れることだろう。  
私が東大新聞に在籍したのは、昭和二十七年から三二年で、うち前半は当時発行されていた『東大教養学部新聞』に所属した。教養学部新聞は、本郷の東大新聞とは独立しながら、やはり兄弟分の關係にあつて、何かあると出入りしていた。あの第二食堂の階段を上がつて東大新聞のドアに向かうと、教養学部の学生は、なんだか一段とおとなの世界に足を踏み入れる思いがしたものである。今はどうか知らないが、当時の東大新聞の部員たちというと、学生には違いないがかなりおとなの風格があつたように思う。  
また、紙面には教授たちを中心に、時代のオピニオンリーダーたちが、ころよく執筆を引き受けて登場した。だから東大新聞は、若者の主張だけでなく、その時代の思想をよく伝えてゐるのではないか。  
私が卒業するころ、小説の五月祭賞に当選したのは、大江健三郎氏の作品で、医学部でのアルバイトを題材としたものだった。そのときも印象の強い作品だったが、やがてもっと大きな文学賞を受賞したりして、ああ、あの人が、と嬉しかった。おそらく縮刷版の中に、私たちはその後名を成した人々の若き日の姿を見ることが出来るのではないだろうか。それも、古い東大新聞を読む楽しみの一つだろうと思う。

## ●東京大学戦後主要年表

- 昭和22年10月 東京帝国大学を東京大学と改称。
- 昭和23年12月 『帝国大学新聞』を『東京大学新聞』に改題。
- 昭和24年1月 『東京大学学生新聞』(東京大学学生新聞會發行)創刊される。
- 昭和24年5月 国立学校設置法公布。新制の東京大学創設(教養・文・教育・法・経済・理・医・工・農の九学部設置)。
- 昭和24年10月 全国大学教授連合、レッド・パージ反対声明。
- 昭和26年12月 矢内原忠雄、総長に就任(南原繁総長辞任)。
- 昭和27年2月 ポポロ事件起る(学内劇団公演会場への潜入警官つるしあげ)。
- 昭和28年4月 新制大学院発足。
- 昭和29年6月 教育二法公布。
- 昭和32年3月 『東京大学学生新聞』廃刊。4月より(財)東京大学新聞社により『東京大学新聞』復刊。
- 昭和32年12月 茅誠司、総長に就任。
- 昭和33年4月 地球物理観測所を設置。
- 昭和35年4月 東大教授団四百名の安保批准反対声明。
- 昭和35年6月 安保改定阻止デモ、樺美智子死亡。
- 昭和36年3月 教養学部の文科一類・二類、理科一類・二類をそれぞれ一類・二類・三類に改編。
- 昭和37年11月 大学の管理運営問題起る。
- 昭和38年12月 大河内一男、総長に就任。
- 昭和41年3月 経済学部本館、工学部九号館を新築。
- 昭和43年1月 医学部学生、研修医問題でストライキ。
- 昭和43年6月 医学部学生処分問題で大講堂が封鎖される。
- 昭和43年10月 全学部、無期限ストに突入。
- 昭和43年11月 加藤一郎、総長代行に就任。
- 昭和44年1月 警察権力導入により大講堂等の封鎖解除。
- 昭和44年1月 昭和44年度入試の中止を決定。
- 昭和45年度入試を嚴重な警備態勢のもとに実施。昭和44年度卒業式・昭和45年度入学式は行わないことに決定。

# 帝國大學新聞

## 全17巻(大正12年)↓昭和23年)・別冊1 好評既刊!

●『帝國大學新聞』は大正9年12月25日に創刊され、昭和19年紙名を一時『大學新聞』と改めるが、その後再度旧紙名に復し、昭和23年まで一、二〇〇号発行された。当初は週刊四ページ立てであつたが、昭和8年より十二ページとなり、当時の大学新聞の中でも量的にもまた質的にも他に抜きん出た。

●『帝國大學新聞』の発行は、編集・製作部門には学生があたり、他に専従の職員が広告事務を担当し、一般紙に引けを取らない内容を誇つてゐた。紙面には学内記事は勿論、その時々の社会問題、思想問題を論じ、ライターには大正、昭和期を担つた多くの政治家・学者・文化人が多数登場する。特に、日中戦争期以後、一般誌紙に対する検閲が厳しくなる中で『帝國大學新聞』が象牙の塔の中で発行されてきたという性格上、比較的寛大な措置が取られていたため、他の新聞・雑誌には掲載されないような記事が多数見られる。

●弊社では、昭和60年(一九八五年)に『帝國大學新聞』創刊65周年を迎えることを記念し、(財)東京大学新聞社の全面的協力によって、大正12年から昭和23年までを縮刷・復刻版を刊行した。また本復刻版には、記事索引を付すと共に、通常の新聞復刻版には例を見ない「執筆者索引」をも付し利用者の便を計った。

●本復刻版は、日本近現代史・思想史・新聞史・大学史等、幅広い分野で活用されるべき重要資料とならう。

●復刻版概要  
体裁 A4判クロス装函入 中性紙使用  
頁数 総七、七五三頁  
付録 記事・執筆者索引(付録のみ分売可)  
定価 三〇万円(全17巻別冊1揃い)

秋元寿恵子	14-438
青山利雄	15-50
青山敏夫	17-256 268 354
青山敏雄	17-416
青山昇	10-241
青山富士夫	17-304 510
青山保	17-32 97
青山道夫	14-349 450 16-220
青山洋一	17-474
赤石恭二	1-264 310
赤石修三	4-197 273
明石二郎	15-191 16-139 209
明石武彦	1-222 236
明石鉄也	4-45 7-13
赤神良謙	6-378 7-140 376
赤木健介	16-32
赤木仁兵衛	16-118
赤城宗徳	8-155 167
赤木田冬彦	7-92
赤須文男	17-109
赤塚京治	14-249
赤沼実	1-267
赤星六郎	5-102
赤堀英三	12-61
赤堀四郎	17-28 62
赤間道夫	13-85
赤松克麿	2-272 4-19 7-99
赤松要	14-213
赤松秀雄	17-2
蛙 閑	2-138
安芸峯一	17-481
秋川早男	6-127 149 157
秋沢修二	4-232 288 5-68 259
秋田生男	4-257
秋田雨雀	3-529 4-52 5-270 6-319 8-91 9-273 465 10-434 477 11-206 378 12-14 30

## あ

Arving Langmuir	8-442
アランデル・デル・リ	2-418
アン・モロー・リンドバーグ	15-27 35 43
阿 忠郎	3-479 487 495
相川順吉	17-410
相川省三	5-112
相川春喜	5-81 7-410 9-36 10-144 13-223 274 430 494 14-154 333 398 15-21 56 120 160 236 256 360 16-70 162 210 274 324 394 462 17-31
相川広秋	16-140
相島敏夫	11-30
会田軍太夫	12-405 13-117 15-36
会田 由	9-364 15-45
阿以田雄	3-342
相津段平	12-513
青江舜次郎	10-470
青木栄一	3-540 4-88 332
青木恵一	4-98 224 5-12 144
青木正兒	11-50 287 17-275
青木誠四郎	16-80
青木節一	2-134 356 416 3-66 168 379 4-335 5-318 6-3 333
青木 孝	5-6 298 6-24 116
青木高彦	17-312
青木得三	6-111 7-19 11-74
青木富太郎	8-310
青木延春	15-352
青木寛夫	16-42
青木文象	11-131
青木 保	5-350
青木了介	5-255 6-108
青戸 晃	1-224 308

# 帝國大學新聞記事・執筆者索引

A4判上製本・272頁(解題) 殿木圭一 定価18,000円